

昭和60年度岩手県立教育センター研究発表会

記念講演の記録

期日 昭和61年2月15日(土)

会場 岩手県公会堂ホール

主催 岩手県教育委員会

岩手県立教育センター

後援 岩手県教育研究所連盟

記念講演 「教育改革の課題」

講師 日本学術振興会理事長 木田 宏

3日間にわたります研究発表会の終わりの日に、こうして多敬お集まりいただきましたことを光榮に思っております。

今、ご紹介ございましたように、昨年の3月まで国立教育研究所に7年ばかり勤めさせていただきました。そして、いろいろと教育、研究という問題を生いながら考えてまいりました。

どうも大学でやっている研究というのは、上滑りしているのではないが、先生方のように、現場で仕事をしていたらしゃると、そうお感じだと思います。データを取ってみても、日本の政策的研究というものは、大役に立つし意味があるけれども、大学の先生方が書いているものはあまり役に立たないという結果が、国立教育研究所の研究員の手での調査研究の中にもでてまいりました。それで、自分たちは何をやっていった人だという問題意識は、常にもっていたわけであります。どうかしますと、県のセンターでやっている研究も、当局の人たち、というのは教育委員会や指導課の人たちから見ますと、好きな趣味みたいなことをやっけて、やっぱり現場の役に立たないという声は聞こえないわけではないのであります。現場から遠くなるほど、教育の実践の場から遠くなるほど、研究というのは空を切って勝手なことをしているという感じが濃くなってきて、教育研究所におります間、これはどういふことだろうなあと考えておりました。

各国の人たちも、皆同じ問題を意識しているとみえまして、国際的な会合の場でも、教育と研究ということが、大事なトピックになります。私も、世界各国の研究者が集まりますそういう学会に、職業柄入っております。3年ほど前、シンガポールで、教育と研究について、何か keynote speech (基調講演) みたいなことをやれと言われて、いろいろ考えてみました。

なぜ、日本の教育というのは素晴らしいのか、そして、その教育界と研究というのは、どういふふうにつながっているのかということも、当時の国立教育研究所の人たちとも意見を交換し、考えてみました。私は、研究というのは、自分のやっていることを反省してみるというところから始まると思っております。その意味では、日本の学校の日常の場における、その反省ということが、研究の出発点になるのではないかと。その現実だけを見てまいりますと、よく見えないことがありますから、できるだけ、自分でも遠くの立場から見るとか、他の人にそれを見てもらって、いろいろと指摘し教えてもらうとか、そういう自己反省からスタートしてするのが研究ではないか。日本の教育界は、その考え方が非常に強く、それが日本の教育を高めているのではないかと。

確かに、世界の教育者の中から、デュエーのような素晴らしい、皆さん教育学で知った名前をあげると、みんなヨーロッパの人たちになってしまう。世界の教育者あるいは世界の教育研究者という本を作ってみて、うちの教育研究所の連中が絡んだのですが、いちばん困ったのが日本でした。日本では、本当の教育者とか、教育研究者とかという人を、どうやって拾っていいのかわからなくなってしまうんですね、ですから、教育の理論とか、教育研究とかというと、みんなよその国の人の名前になる。各国の人が集まって話をしてみると、そういう素晴らしいだけではないが、こう言ったこう言ったと、ソーンタイクとか、こう思いつくいろいろな人が、皆さんの日常の教育実践の場に、いろいろな影をおしていると思っております。遠い所で研究している人たちが、たいへんは influence (影響) を現実に与えていると思っております。そういう点、日本には、どこにも教育学者あるいは教育の理論家がいるんだということになると、どこにも見えなくなってしまう。まあ、でてくるのは、福沢諭吉先

生。これで日本の教育がうまくいっているということはどういうことか。

そこで、私も各国の人たちとの出会いの場で、いろいろと控えてみました。研究というのは、いろいろな段階がある。多くの場合、教育研究というと、政策研究であったり、哲学の研究であったりかも知れない。しかし、あらゆる研究の領域がそうであるように、自分たちが、今やっている仕事を見直してみ、それがどういふことになるのかという反省から研究はスタートする。それが研究の出発点だと思う。そういう点からいくと、日本の教育界は、素晴らしい研究をやっている。飛び抜けて立派な先生が出てきて、一人その旗を振ることはないかもしれない。ほかには、何人かの優れた先生も数多く出てくるかもしれない。しかし、日本の教育と研究という場を見つめてみて、いちばん皆さんに紹介してみたいし、誇りたいと思うのは、日本の教育実践の場に、研究が密着しているということです。校内研修から始まりまして、地域のいろいろな教科の研究会、郡単位の研究会、そして、日本には、そういう研究を支える後になるものとして、地方の教育研究所というものが、500近くもあるのです。今日も、この研究発表会にお集まりになって発表になる方々の名簿を見ますと、県のセンターだけでなく、市町村の研究所に籍を置いて、しかも、学校に勤務しながら勉強しておられる方が、数多く発表しておられる。こういう強さが日本の教育界を支えているんだと、少し苦しまぎれの点もありましたから紹介を致しました。

そうしたら、これが大変、ヨーロッパの人たち、香港やシンガポールのの人たちに受けました。それは、大変いい事を言ってくれた。我々の所では、研究というと、はるかがわたることになってしまって、学校の先生というのは、そんなに勉強しない。日本では、そうやっているのですか、それは素晴らしい。というふうに元氣づけられました。

実は、この研究会に采いというお話を、1月是一年前にございまして、私はもう、研究所をやめることに、自分で腹を決めていたものですから、すぐにはOKしなかったのです。それで、研究所をやめて 断りましたら、どうしても出ていふということですので、今日、こうして出てまいりました。何をお話していいかわからないのですが、教育改革のことについて、何やら話をしろということでした。今、上山さんのご紹介にもあったように、私は臨時教育審議会に片足を踏んでいるので、その話をしろということですが、ちょっと痛しかゆしのところがございます。あいつ、臨時教育審議会のメンバーでありながら、こういう所へ来て、こういうことを言っているなんて、逆にとられるとちょっと困るものですから、どの範囲でどういふふうにお話ししたらよいかというのは、案はとまどっています。

しかし、教育改革という問題が、今、進行しているわけですので、このことについて少し迷いを置いて考えてみたい。そして、教育改革というのは、何をどう改革することなのかということを考えてみたいと思います。教育改革の論議というのは、何も今に始まったのではないのでありまして、歴史的にも古いのです。明治の初めに学校制度をつくり、折にふれて審議会をつくって、見直し見直し、改革改革と、繰り返してきているわけですね。戦時中も、戦後の大改革もそうでした。そして、あえて外の人に向かって、多少皮肉なことを言くとすれば、昔の方が行き詰ってきて困ってきたら、みんな、教育が悪いというふうにもちがけてくる。むがみかもしれませんが、困った時に人のせいにするという悪い癖が、日本のあらゆるところに、教育界の中にもあると思います。また、善意に考えれば、やっぱり、とどのつまり、衰へるところは教育だという一般の人の共通理解でもあり、いよいよ手が詰って来ると、ひとつ教育から直してくれないかということになる。こういう見方で見ることもできるかなと思います。それほど教育という問題が大変な問題である。皆が夢にしている問題

であるというふうに言えるのではないかと思います。

さて、今回の教育改革論議です。これは、昭和50年代の半ば頃から顕著になってまいりました。ご案内のように、昭和47年に第一次のオイルショックが起こりまして、経済界は、混乱の渦に巻き込まれたわけですね。そして、何とかあわてふためいて、アラブの方の神様にも手を合わせてやりながら、第一次のオイルショックを過ごした。日本の国は節操のない国だという事が、その時に言われたりもした。それが、第二次のオイルショックもうまく乗り切り、他の国の人々が感心するようになった。しかし、この、日本が早く経済的に立ち直って、ケイアイと市場を世界中に伸ばしていくという時から、経済摩擦の声が大きくなってきたんですね。仕事をしようとする、friction(摩擦)が多くなる。こちらは、善意で一生懸命やっている、働きすぎだと悪口を言われる。もうケシ、ひっこんでろと言われる。そこで、どうしたら世界の人たちから小言を言われないで、frictionを起ささないで、しかも、仕事が世界に伸びていくか、このことは、日本の企業で、世界にはばたいている人たちが、本当に真剣に考えなければならぬことになってきました。昭和50年代の初めから、いろいろな意味で、日本人のものの考え方を変えなければならぬという論議が起こって来ました。

そして、その論議が、昭和54年の10月に、期せずして東京と大阪で実を結んだのです。第一弾は、東京の経済同友会が、「多様化への挑戦」というテーマで報告書をまとめました。日本の国には、閉鎖性、画一性がある。非国際的な価値観になっている。こういう国民が次々に再生産されてくるのであれば、日本の経済の将来も、日本の発展の将来もない。だから、もう少し、多様性というものを生み出していく努力をしなければならぬ。まずは、教育界を眺めよう。教育界というのは、あまりにもmonotonous(単調な)であり、画一的である。そして、教育界自体も閉鎖的である。だから、もう少し教育体制に多様化を入れる。学校も、6、3、3、4というワンパターンではいよいよしてくれ。国際性をもっと身につけるような教育を進めてもらいたい。企業だって、もっともっと、職員の採用その他に、多様な発想を取り入れるようにしなければいけない。こういう「多様化への挑戦」という提言を、東京の経済関係者がまとめたわけですね。

同じく、昭和54年の10月に、関西の経済同友会でも、「教育改革への提言 — 2世紀への選択 —」という題で意見がまとめられました。この頃は、学校特に中学校が荒れるという問題が、かなり目につけていました。それで、公德心を養成するということから始まりまして、もっと開かれた愛国心を涵養しないと、無国籍者になってしまう。多様な個性、豊かな創造力を育てるようにしないと困る。今のよう、受験で進み込み、ワンパターンで採点をしていくことを、教育界が繰り返してもらっては困る。教員婦人の、教育に対する意識も、変えてもらわねばいけません。こういう、経済界から、日本の将来の産業活動、企業活動を眺めてなんともか変えてもらわねばい、日本の企業も、そのうちやつけられてしまう、二つの危機感からの声です。

もうひとつは、日常の市民の中から声が出てきたわけですね。学校へ行きたくない子供が、だんだん増えてきている。登校拒否にはいろいろな原因がある。家庭の中で、「そんなこと言わずに学校へ行きなさい」と言っているうちに、親子の間のいざこざが絶えなくなる。だんだん、家庭の中での暴力、無関心、そういうまともではない状態がみだりになっていった。どうかすると、親を殺す。おじいさん、おばあさんを殺す。かよりの暴行でも、そういう現象が起こる。かと思えば、自分の子供であるのに、自分の家庭に置いておけない。強制的に、どこか収容所みたいな所に送り込まないと始末に困る。そのいちばん悲惨な状態が、産後ヨットスクールでありまして、なぐられようと、殺されようと家に帰って来るな、金をつけて渡してしまうという荒れた状態が新聞で報道されました。こういうことを見ていると、どうも学校というものがあかしいのではないかと、何を教育

しているのだろうかという問題意識を、みんなが感じるようになった。教育研究所で、若い研究員を採用する時に、中学校で時間講師をしていた大学院生は、「なかなか大変です。人の話を聞かせるのに、前半20分は空費してしまいます。とても授業になりません。」と言っていました。本県の学校で、そういうことがあるかどうか知りませんが、そういう状態があちらこちらでみんなの目について、日本の教育がおかしいのではないかという心配が広まったのです。

その頃、各県の教育センターも、それぞれ、この状態を捨てておけない、どうしたら荒れる学校を鎮めることができるか、こういう問題意識で調査・研究に取り組みれたり、指導に取り組みれたりしたところがたくさんありました。そして、ようやく峠を越えたかと思っていたころ、中学生の暴力行為はもう病んだと警察庁までそういう統計を発表したころ、皮肉なことに、発表した直後の昭和58年の2月に、ショッキングな事件が二つ起こったのです。

その第一は、横浜の山下公園で、中学を卒業する前後の子供たちが、夜な夜な浮浪者を追いかけて殺していたということです。それがおもしろいと言う。それは、昔からそういう気の毒な方は、たくさんおられる、しかし、冷たい冬、盛岡ほどではないにしても、冷たい冬をベンチで人ごみか机文と寒さに身を寄せている浮浪者たちを、子供たちが追いかけてなぐり殺す。こういう事件が起こった。これは、正直なところ、私もショッキングでございました。

その数日後です、東京都町田市の忠生中学校で、おひえた先生がおどかさす子供に対して、ナイフを突き付けてけがをさせたという事件が起こりました。私たちが怒りを聞き、警察も荒れる卒業生が少しなかりそうだと、公式に発表したとたん、そういう事件が立て続けに二つ起こったものですから、またそろ、学校は何をしているかということになりました。何かおかしい、とにかく教育の世界はおかしい。教育の問題が、今まで表層や経済界の人たちの問題であったのが、この二つの事件を契機にして、政治の世界に踊り出たというふうに思います。

政府も、中曽根総理をはじめ、こういう状態で教育界を放っておくわけにはいかないと危惧感が広まり、この教育改革の問題が、政治の課題として論争されるようになりました。そして、昭和58年12月の総選挙で、教育改革をひとつのトピックにして争うということになったのです。そして、昭和59年、新春を迎えて、文部省に任せておいても、この崩れていこうとしている教育は立ち直らないから、政府全体で挙げて取り組まなければならぬ、臨時教育審議会というものをつくって、全道府で挙げて教育の立て直しを図ろうということになったわけです。国会でのにぎやかな教育論議を経て、やっとのことで昭和59年の9月に発足しました。ぶつう審議会というのは、やたらに会合するものではないんですが、審議をせかせされる状況になりました。毎週2回ずつというようにハイビッチな審議を重ねております。その都度、紙面にファースト出ますので、皆さんも何か起こったかという印象を受けたと思います。そして、去年の6月26日に第一次答申がでました。

そして、その第一次答申に対するリアクションも受けながら、第二次答申をこの4月に手ごとのように、今、急いでおります。先月の22日に、「審議概要 その3」という膨大なペーパーが発表されました。4つの分科会が一週間に一回以上論議を重ねてまとめた議論をこう寄せ集めたものですから、大変なボリュームになっております。その審議の方向は何かということも、ちょっとお話しなければなりません。第一次答申というのは、改革の具体的な提案がいちばんおもしろいについていましたが、それが少しチャキであったという批判を受けていますが、それは、審議会に取り組み基本的考え方の枠組を決めたというところからいけば大事な意

業があると思います。答申は3つに分かれており、教育改革の基本的な方向を提示することがひとつです。二番目がこの版権教育審議会の主要な課題を8つの領域に分けて考えるということですが、この二つで審議会の議論の枠組を決めたところで、第一次答申の意味があると思います。もちろん、決めてしまったらそれで済むかというものではないのでして、弾力的にいろいろ対応するというのが関係者の考えているところです。

まず、教育改革の基本的方向として、今日の教育の現状、その背景はどのようなことなのか、そして、改革の基本的考え方はどういうふうに進めたら良いのかということを取りまとめる。それらを整理しながら、この審議会で鋭意論議をまとめるように、8つの領域を取り上げました。それを少しお話していきます。教育の現状という点について、日本の教育は明白な未来大変な危機をとり、世界の注目をあびていると2~3行はなっています。さげすみながら、お小言が一歩はじまるわけですが、量的には拡大したが、どうも学力偏重の意識がますます強まっている。教師の意識も少し欠けている。生徒や親の態度も異変多い。テレビ、ラジオの影響にも汚染されているし、物質中心主義になっている。画一的な考え方がびびっている。こつこつ硬直した教育界の姿勢を、もう一度打破して、新しい弾力的な21世紀に向けての考え方をまとめなければならぬと、二ついう番を出しています。

これからの考えオとしては、個性を重視して二つ。個性尊重の原則である、もちろん、自由化とかそうでもないとかいう議論をいろいろとしたのでして、その名前の結果おたいなことです。個性重視の原則、基礎基本の重視、創造性、考える力、表現力を育成する、選択の機会を拡大する、教育環境を人間化する、生涯学習体系へ移行させる、国際化への対応を図る、情報化への対応を図る。こういう8つの方向づけというものを考えていこうということになりました。

そのためには、審議の領域として、先般発表されました審議取組書の、ている8つの領域で論議を踏めていこう。第一は、21世紀へ向けて教育の基本的な考え方、教育の目標を考えよう。その教育の目標というのが三つの terminology (術語) になってきたのです。まあ、これをどう考えるかは、皆さんのご判断にお任せしておきます。そして、第二番目に、生涯教育という観点で、教育のいろいろシステムを組織化し、体系化し、学習社会という問題を緩和していく。第三は、日本の高齢教育の高齢化、個性化という問題です。日本の教育は、初等中等教育に関しては確かに素晴らしいけれども、高齢教育になると、どうも国際的に比較してきて素晴らしいとは意味ない。もっと、高齢教育の高齢化を図り、個性化を進めなければならぬ。4番目が、初等中等教育の充実と多様化であります。教育内容とか学校制度とか、健康教育とか職業教育とか学級編制の条件の改善とか皆さんのいろいろな身近なことが書いてある。そして、5番目に、教師の資質の向上という問題を大きな課題問題にしよう。6番目が国際化という問題の対応を図っていく。7番目に情報化への対応ということを考える。8番目に、教育行政の刷新を考える。

その8つの領域について論議を進めてきた実績が「審議報告その3」という本に書かれています。その中から今後、どういう答申にまとめていくのかということ、実は中に入っているけれども、必ずしもわかっているわけではないので、あと二か月位の間、ぐらと答申の形にまとめるのでしよう。

しかし、従来のいろいろ審議会のやり方と、かなり違っておりまして、最初の一年間は、多岐な能力をもった人の方が多いと見込んで、中で議論するばかりではなく、外向きにも、いろいろと議論を延ばされたらいいから、一人一人の意見が、みんな、あみでもないこうでもない、にぎやかに報道されました。この間、おられる皆さん方は、一体、審議会はどちらへ行くのだろうかというふうにお考えになったと思いま

す。たしかに教育の問題というのは、みんな悩んでいることであり、皆さんが悩んでいることは、みんな本音です。自分の体験に即してこうであったと言えば、それはうそだというわけにはいきません。それが、みんな違うわけですから、なかなか議論をひとつにするというようにはできないことではありません。私もまた自分の意見でものを言っているわけですが、これは、みんな、それぞれのあの感じの意見でものを言う人だったら、勝手に言ってもらった方がいいのかもしれない。にぎやかに百舌争してやっているのがいちばんいいのかしらんと、中居さんから言う考えでしたのであります。ちょうど、その場合の所にまとまって大論文になったのが、「審議概要 その3」です。この経過をたどって、今日まで教育政策論議が進んできているのです。

しかし、その表の審議会でみんな議論をしているということはさておきまして、もう一遍、なぜ教育政策かという問題は、やっぱり考えておかなければなりません。教育研究所におりました時には、ほとんど毎週のように各国から人が集まってきておりました。そして、この臨時教育審議会の働き、その他もなあります。「とうして日本ほど素晴らしい教育の成果を上げていて、どこがまずいから変えろというんだ。」と、こういう不思議な顔をして質問するのです。確かにその国の人から見ると、日本の教育というのは、大変うまくいっているように見える。

例えば、これは、ちょっと古い新聞ですが、昨年の7月2日に、アメリカの前の教育長官が日本にまいりました。その時の講演が日本経済新聞にのっていますが、日本の教育制度は世界的に見て、最もすぐれており、教師も生徒も全体的に見て極めて質が高く、それが新しい民主主義社会の骨髄かかっていると言ったと書いてある。たいがい、よその人は、みんなそういう調子でほめてくれます。むしろ、全部が全部そういうものであるというふうに手離して喜ぶわけにはいかないのですけれども。

また、市川昭午という研究員が、「アメリカにおける日本教育研究」というテーマでまとめた本に文章があります。その中に、アメリカの人たちが、日本の学校教育が高い教育成果を収めていると考えている理由をいくつか書いています。レベルが高い、幅の広いカリキュラムに十分時間をかけている、基礎科学の要求水準は高い、全人教育をめざし芸術、道徳、体育を含んだバランスのとれた内容である、感心してくれているわけですね。これをうそだというわけにはいきません。教育は献身的で、生活指導を含む広範な役割をこなす。学校の先生が家庭訪問しているというたらびっくりしますよ。どこの国にそんな先生いますか、民主主義で公平に生徒を扱う。教員が尊敬され、社会的地位が高く、身分が安定し、給料も悪くない。先生方の給料は、正直なところ、今、日本が世界一高い。特に、今のようになが2割も上がりますと、アメリカよりうんと高くはります。ですから、よその人が見ると、すべて良く見える人ですね。教育条件の地域間格差がつかない。施設設備、教員の指導等、同一の水準である、これは間違いのないことでして、実は最近サンプルで学力調査をやって比較しました。そうすると、どの教科も前よりは成績が上がっている。成績が上がっているということも平均で言っても、しょうがないと思う人ですけれども、社会と世界の格差の隔たりが、うんと縮まれているということだけは、まことに素晴らしい成果だというふうにも思っています。どこの国の人を、若手の僻地の学校を案内しても、それは素晴らしいと感じるにちがいません。皆さん方の中には、僻地ではいろいろなことが真合意とおぼえかもしれませんけれども、それは、よその国のそういう格差の隔たりとは全然比較になりません。僻地の学校へ行ったら、テレビはあんなに教員はそろってあります。そういう国はないんです。ですから、本当に、日本に来て学校を見せると、どこの国の人でも素晴らしいと言っているのであります。

ところが、日本の中では、臨教審の委員をはじめ、こんな困った状態とみんな思っているわけですから、そこに大きな開きがある。そして、外の人だとして多少日本の様子がよく分かっている人たちが日本の教育を見てみると、批判の目は厳しくなるのです。日本の国内で、語学の教師をしている外国人が、日本の教育を何と見ているかを手とめたものがある人ですね。教育というものは、自分のために学ぶことと、学ぶことを愛する態度を培うのが教育だ。批判的能力を育成するというのが教育だ。知識の創造応用を促すというのが教育なのだ。生涯にわたる真理探究、独自性の尊重、協力の精神、独立の考え、こういう実践的態度を育成する。あるいは、自己表現や自分の意見を附随するその仕方を教える。こういうことが教育だと我々は考えているのだが、我々の教えている日本の学校の教育を見ると、この教育の本質的なことがないのであればいいという批判にならなくてはなりません。なかなか、痛い所を突いていると思います。

ですから、教育とは何かということと、その外から見ている場合、そばに寄っていろいろ見ている場合、見方がおのずと違ってまいります。100%立派というものはないので、それでいいのです。そうした本質的な意味が出てくるということは、ありがたいことです。

それでも、日本の教育の改善点ということについては、例之ば、入試制度がどうも理解しがたい、日本の教育は金がかかりすぎるどころがおかしいと見えるのです。高校で授業料がだんだん高くなっていく国というのは、先進国では日本しかありませんね。大学だって、多くの先進国は、日本よりはるかに安い。ドイツだって、オーストラリアだって、ニュージーランドだって授業料はありません。日本では、大学に行くのには、授業料を出すのが当たり前だぐらいに思ってますけれども、この常識はひっくり返っているわけです。

そこで、いろいろものを考える時に、非常に幅広い比較の中で考えていくということが大事なんです。一人当たりのクラスのサイズにしても、決して課題であるというふうには出てまいりません。先進国はほぼトントンです。フランスは、日本より、先生一人当たりの子供の数が少なければいけません。フランスの人口密度は、北海道の人口密度よりも、はるかに少ないのです。そういう所で一人当たりの子供の数が少ないのは当たり前です。日本というのは、山があってそこに人間が住んでいるので、手と手って住んでいるという大変いい条件にあります。どこの学校へ行っても、校舎、教室、たまたま、体育施設をみんなもっている、こういう条件は、よその国へ皆さんが行ってご覧になればすぐわかります。

そして、とどのつまり、豊かさを理由に国際比較をしてみますと、日本の子供たちの成績はすぐれて良い。ですから、何か悪いんだと、よその国の人には不思議がるのです。日本の教育がこんなにか素晴らしいと、こんな文句を言われているというのは、どういうことか。私は、この思います。明治以来の教育発展の素晴らしい成果が、日本の教育水準を高めた。明治の初めには、富国強兵ということで、国民が一斉して世界の先進国並みに、学校制度を通じて次の世代の子供に教えるようになってきた。それが、大衆教育のいい教育システムを経て、戦後にも引き続いて教育が普及し、その結果日本の国は発展をした。社会も発展した。そして、気がついてみたら、教育の発展よりも、社会の発展の方が早かった。教育界というのは、そういう点から見ると、置いてきぼりをくっている。その遅れているいろいろな問題が、改革の課題としてでてくるのです。ですから、明治の戦前までは、教育界が日本をリードした。親の知らないことと、学校の先生が子供に教えるというパターンになってきたのです。戦後、教育が普及し、教育のもっているエネルギーと社会のもっているエネルギーが、いっしょに増えてきた。それが、経済発展の入口の所までの状態であつた。私は思います。ですから、戦後の教育改革の時には、義務教育9年にしてもらっては困る。社会の方は、その負担が大きいとい

て文句を言っていたわけです。しかし、今や教育が社会をリードできる状態ではなくなりました。教育は、息をき切って社会の後を追いかけているという状態に苛まわりしている。

人によって取り上げ方が違うかもしれませんが、いくつかの問題が上げられます。まず、現実起こっている事実で、困るなあとするのは、国際化に対する対応が全然できていないということです。日本は産業が発展し、世界各地に、日本の商人がいっぱいはいない。日本の物がないところはないぐらいです。アフリカの山奥にだって、カセットテープから何か入っている人です。日本の船舶は、世界中の海を走り回っている。それで、だんだん締め出しをくっているわけですよ。ソ連からも出ていけ、アメリカからも出ていけと、追はれられるわけですね。

こういうふうに、日本人が世界に発展していくものですから、一時的に一人だけ単身赴任していればいいという状態は、昭和30年代のこととして、昭和40年代からは、みんな帰国を促して、急激な海外へ出て行くというふうになりました。そうすると、そこで子供さんの教育という問題が起こる。先進国の学校は、あらかじめ気持ちよく日本の子供を受け入れてくれる。英語ができない、スペイン語がわからない、ドイツ語がわからないという断るような学校はない。ところが、その子供が日本へ帰ってくると、日本の学校は受け付けてくれない。日本語がちょっとあやしいですよ、1年か2年下へ入れたらどうですか、というようなことを言うんですね。これでは困るではないか、日本の教育というのは、世界中に子供が広がって世界中で活躍をし、そしてもどってこなければいけません。行きは良い良い帰りは悪いという教育制度では困ります。高等学校にだたら試験でみんな落ちてしまう。入れない。こういう問題が、日本を支えるために活躍している人々から起こってくる。これは容易な事ではないことです。

ようやく、海外における日本人学校の体制も、だんだん整えてまいりました。今、一年間に海外に出ている先生達の数は、1000人にのぼっている。海外に、70何校という日本人学校があり、補習校だけとしてみても、90校ほどある。ニューヨークの町に、日本人が40,000人も住めば、それはこの岩手の小さな町や村どころではないのです。ニューヨークには、補習校だけだけでも20何校あります。ですから、日本の教育というのは、そういうふうに子供たちが世界中に散らっている限り、世界規模で考えなければならぬのに、日本の教育は全然それに対応してくれない。この不満が最も大きいですね。日本の大学に入ろうとしても、留学生と呼んでくれるのに我々はいないという問題が起こる。これは確かに、直してもらわなければならない現実的な問題として、教育界からすれば、ごく一部の現象かもしれませんが、しかし、かなり本質的な現象です。

茨城県の筑波学園都市というのがあり、竹園東小学校という学校があります。そこには、20名ぐらい外国の子供たちがいます。筑波には、筑波大学をはじめとして、並列な研究施設がありますから、そこへ、いろいろな国の人たちが着の服を連れて気軽に来る。子供は放つておくわけにはいらないから、学校に入れなければならぬ。すると、外国人の子供だから入れませんというようなことを言っていたら、それは様になりません。みんな入ってまいります。そうすると、来る子供たちからみんな英語をしゃべるが、とんでもない。東京やアジアから来る子供たちは英語なんてそうしゃべりません。中南米から来る子供たちはスペイン語をしゃべるわけです。だから、英語の先生がいれば解決するという問題ではないのです。そういう問題が、大抵局所的にだけとも起こりつつある。これも、気持ちよく対応してやらなければいけない。日本が国際化をし、日本人が海外に行くだけでなく、向うの人が日本に入ってくる。日本の学校で勉強したから世界の学校へ行く、というような流れが流れてこなければ、日本というのは具合悪い国だということになるのです。ですから、これは、皆

さん方の日常では縁の遠い話かもしれませんが、これからの日本社会、日本の教育界ということを見ると、やはり本格的な対策をしておかないと困る問題です。また、これは、世の中の方が国際化しているのに、学校は国際化していない、学校が違っているということの裏面です。

もうひとつは、情報化への対応という問題です。これは、大衆文明的変化をこれから反芻していくのだろうと思います。学校が生まれた時には印刷物というのがありました。印刷機もありました。ですから、学校は、当然印刷物の教科書を使って教えるということが前提です。しかし、これも、世界中すべてそうであるということではないのです。印刷物のない所はたくさんあります。そして、昔のように、ことばだけでコミュニケーションしている人たちというのもたくさんいます。いわゆる文盲と言われる人たちですね。文盲という人たちの生活は、ことばを交わしてコミュニケーションして用は足りる。そして、作物を栽培し、牛や馬を使い、狩をして生きていくことができるわけですから、印刷物はいらないのです。そういう所の学校では、もちろん印刷教科書はありませんから、やっぱり、オーラルにやるほかはありません。学校を作らなくて、これが蓄積しないものだから、文盲対策というのは大問題であって、何とかやらなければなりません。アジアの辺地でも、アフリカでも、みなさんが苦労している。印刷物を持ち込んで、ターツと文盲対策で教育を興そうとしても、何年かたって行ってみると、全く蠶の河原です。そこにある印刷物は、文盲対策に使った教科書だけで、生活の中には何もないのです。しかし、私が学校を聞く時には、印刷物というのがあって、本を読むことが教育であるという前提で始まったわけです。

しかし、テレビから始まる情報化の波というのはすごいですね。こういうものは、学校が始まってから後で入ってきたものだからね。視覚教育ということ、いまだに子どもみたいに戸惑いになっています。子供の方は、コンピュータをおもしろいと言ってはいますが、学校はそういうものとは全く関係なく、教科書や黒板でやっています。情報化という時代が進むにつれて、世の中の動きと学校の動きとがずれてきて、深刻な問題を起こしてくると思います。

ひとつ、笑話ですけども、私にとって忘れられない興味深い体験をしたので、そのことを少しお話します。それは、テレビの影響がいかに大きいかということ。私は羨望したのです。今、東京を中心にして、放送大学というのがスタートしており、いろいろと話題を呼んでいますね。個人的なことを言うようで恐縮ですが、私は昭和44年に社会教育を担当するようになりました時に、何とか日本でも教育界に、この放送というメディアを、ただ受け取るだけでなく、送り手としての放送メディアを教育界に取り入れたらいいと考えました。その放送大学ができるまでに、20年かかりました。私の在任中には完成しなかったわけですが、しかし、とにかくできた。

教育界にそういう新しいものを持ち込むわけですから、準備している過程に、いろいろなことがいっぱい起こるのです。それで、大学の先生が一方から集まってきて、こちらはNHKなどのアロチエーサーというのが集まってきて番組をアロチエースすると、なかなか意見が合いません。当然な人ですね、NHKのテレビを受け止めるというのでは、雑誌や本を読んだりするのと同じであり、教育のメディアとしてテレビや放送を使う時には、教育する人がどう使うかということが重要であると、私は思っていたのです。私は、テレビを使うときには、空気や音がいらねえし、ろいので、あまり作ってはいけないという感覚をもちました。

翌年にはアメリカの大学を見せてもらいました。そろそろ、アメリカの大学は、テレビで講義を始めているというふうな状態があったわけです。インターネット大学のテレビ・ラジオ学科の教授という人に来て、い

ろいろと大学の中の状況を聞かせてもらいました。どういふ番組がいちばんいいかということを知りてみました。もしたら、あんまり作り上げた番組でない方がいい。というのは、その大学で生きて、先生の講義をそのまゝ録して、翌年も翌年も、教授が退官しても使っている番組があるのです。それで、なるほど、素外いいなあと思つたのは、理科の実験でした。階段教室で実験して何も見えないですよ。ところが、ブラウン管をいっぱい置いて、実験しているところをテレビでやりますと、よく見えるんですね。気象の講義でも、今のひまわりの衛星と同じような気象の画面が出てきます。ですから、人文系よりは自然系の方が使いやすい。その意味では、日本の中でどこが視聴覚教育が上達しているかというところでは、医学部は、あの手術の場面が大事でして、これは皆々のそくわけにはいけないのですが、テレビ教授でものすごくいい教材がいっぱいできています。視聴覚教育なんて言っている教育界がいちばん遅れています。それで、いろいろ見ると、やっぱり、手術なら手術の床屋中継現場をそのまま見せるのがいちばんいいと思つていたので、専断、日本のテレビを見たつて、相撲や野球の美尻中継、国会の美尻中継の方が、変なメロドラマを見せられるよりはよろしい。年のせいもあるんですけども、ちよつとそんな感じもあります。

私も、放送大学に集まりました先生方に、テレビタレントみたいなハイカウなことをしないでいいから、自信をもって講義して下さいと語をしたんです。そうすると、プロデューサーの方は、それでは具合悪いと言つたのです。あんまり上等でない顔が映る人だから、せしは上手にプロデュースされるようにならなければいけない。アメリカの国会議演やケネディにしても、今の大統領にしても、テレビ画面に映る時には、ちゃんと、そはで演出を心得た人がいて、上手にやるんです。そうでないと見ていらぬわいと、片一方は言うんですね。そこで、困つたものですから、実験番組を作つた。

その実験番組は、東大の柳川啓一さんという宗教学の教授が、「天国と地獄」という、大衆観念的な講義をするわけですが、それを東京のある女子大に行って講義しているところを取材にして、6通りのテレビ番組を作つたわけですが、最初の1本目は、その学生5人の座っているイスにカメラを1台置いて、講義の時間中ずっと写しっぱなしにするわけですが、そうすると、先生が最壇の上で、黒板に書いて、しゃべつたり、冗談を言つたりするのが、そのまゝ録出される。2番目は、教室にカメラ3台入れて、いわゆる状況中継中継を行いました。跟つている学生を写したり、ズームを使って黒板の字を大きくしたり、いろいろ解説を交えて撮ります。3番目は、その教授をスタジオに呼んで来て、しゃべつているところや、必要な時にはとも写して1時間の番組を撮りました。4番目はどつしたか、鎌倉のお寺へ修業旅行に行くような格好にするんですけど、その柳川教授が鎌倉のお寺に行って、地蔵さんを見てこれ何こいうことなんだ、和尚と会つて、本尊の仏像を「これはどつた和尚像」ですかとお話しなつたら、そこにある天国と地獄というイメージを何人とか白話する。5番目は、柳川教授のノートを借りてきて、それをプロデューサーの頭で画面構成をするわけですが、いわゆるドキュメンタリーができる。そのドキュメンタリーを見ながら、柳川教授が解説をつけるというのから番組、6番目は、プロデューサーがドキュメンタリーを作って、ディレクターがゼリホをつける。柳川教授は出てこない。

そつた6本の番組を作り、もう一遍、同じ女子大の学生の所に行つて、いろいろ詳細をさせるので、「おもしろいか」とか「わからなかつたか」とか「興味もつたか」とか「勉強しようと思つたか」とか、こつた項目で簡単な質問をつけさせた。研究者は、その結果をちゃんとポケットに入れてきて、こつたとつた女子大の先生が喋らされたわけですが、1時間の講義を6本見るわけにいきませんから、ざつぱりを上手に見せてくれ

たんですね。そして、評価をつけさせた。私はどは、実況中継がよろしいと言ってたわけですが、それでは様にはなれないところがあるのですね。多くの先生方は、テレビの画面を通して見る限り、いわばいいのは、スタジオに一人入って、きちんと準備して講義をしているものであると評価したのです。ところが、学生の評価は、圧倒的にいわば最後のやつがいいんです。「おもしろい」「よく分かった」「勉強しようと思った。」これには私わいでもかびくりにいたしました。どうしてこういうことになるんだろう。その評価をめぐって、集められた先生方は悲憤慷慨、「こんなもの教育じゃあない」「教授ではない」と、おこっている。おこっているけれども学生の方はそう言う。学生だけかと思っていたら、東工大の塚元昂という視聴覚をやっている先生が、自分のモニターを使って同じようにデーターをとって対したら、学生と同じなんです。モニターは学生よりも少し年齢は高いのですけれどもね。それで、私も、一体これはどういうことだというふうに思ったのです。

放送大学で放送する時にどっちで放送するか大問題ですから、私は、大学の仲間の人達に、こういう面白いことか起ったがどっちが本当だと思っかたすおてきた。そしたら、正直に言って言ってくれる人は、大体学生の友だちを支持するんですね。「大体ね、教授が放送で一人相撲をとって、自分だけが得意になってしゃべっている講義なんで、学生がどう評価しているか聞いてみる。それは、その女子大生の友だちと同じだ。」しかし、それでは教育にならないのではなれないと思うのですが、「学生は、大体先生の講義はくだらないよ、あんなもの見ていられない。聞いていられない。けれども、出席しなければしょうがないから出席していますわ。ど、こういうのが木田さん、やっぱり正直なところじゃありませんか。」と、こういう話なんです。

それで、私は、これはえらい事になってしまったなあと思ったのです。どうしてこんなことになったのだろうか。私は、そこでピタウ先生一本当に乗っかいた先生で、上智大学の学長、理事長をしておられて、今はやめて、ローマのバチカンに帰っておられますけれども、一が東京に出て来られた機会にちょっと聞いてみました。そしたら、「木田さん、それは学生の言う通りですよ。」と言うので、僕は「それじゃ教育にならないのと同じですか。」と聞いた。すると、「だって木田さん、勉強しようと思っかたような講義、面白くない講義をして勉強しようというのは教育ですか。」と言われたのです。そして、「勉強というのは、自分で勉強するところから本当の勉強なんで、講義はそこに行くきっかけなんだから、『分った』『面白い』『もっと勉強しよう』という気にならないような講義は、相書の一語にすぎませぬね。」と、ピタウさんにピタウと言われました。僕は、なるほど考えればそうなんで、自分で勉強しようというふうな身持ちの起こらない講義をいくらやっても、あんなもの教育ではないのだから、そこで本当に気がついたのです。

では、なぜそんなことになったのか。考えてみると、これは情報化の影響ですね。私達の学生時代というのは、テレビはなかったわけ、ラジオというと空襲警報とニュースくらいはものです。ですから、情報源は印刷物であって、本を読みました。ところが、今の子供たちは、本よりも前にテレビが入ってくるのです。小学校に上がる前から本の名前の漢字なんて読める。「岩手県」というのはこういう字だというのは、みんな暗んていますが、小学校に入ると「いわて」と、この取扱名で書くという話になるのです。全然ずれているわけです。我々の子供の頃には、あまりテレビを見せなかったと思うのですが、それでも、大学生の頃は、しゃべりにテレビ漬けになって見ておりました。今の子供たち、大学生たちというのは、生まれた時から、そこにテレビがあって、部屋の中にテレビの機殻が一杯流れてきていて、音かしてないとか落し着かないという生活になっていっている。受験勉強の時には、深夜放送が満ちている。あんなもの聞きながら勉強なんができるかというのは、尋常の言うこととして、どうも違わらしいんです。それだと、この情報化というのは、国には見え

ないけれども、我々の生活の基盤というものを引継ぎ続けている。

そこへもってきて、今までのテレビよりもっとすごいものが出てきた。これがコンピュータなのです。今までのエレクトロニクスというのは、目と耳のかわりをしてくれたわけです。要するに視力が遠くなる。カメラの写したところだけですけれども、世界中が見えるようになる。耳だって、いろいろな所の音が聞こえるのです。ところが、こんなで来たコンピュータという機械は、記憶力というすごいものを持っているわけです。みんなそこにストックされてしまう。そうすると、一生懸命覚えろ覚えろと言っていたのが、「先生、そんなこと覚えなくても、私のフロッピーに入れておきますよ。」と言われてしまう。学校の先生方は、あの計算機が出てきた時に、これは数学教育の敵であるというようなコメントを出したんです。そんなこと言ったら、どこへ行っても、コンピュータ好きのレジが入ってきまわね。

このワープロ、パソコン、フロッピーディスクというよう新しいもの。これは印刷物ではなく、電気による情報のストックです。この情報のストックというのはものすごく大きい。そうすると、これから先生、ワープロでやっておいて、原稿をファクシミリで送るわけです。今、読者の委員をやっている菅野さんにして、文化庁長官の三浦さんにして、自分でワープロでやります。そうすると、出版社は、パッともらって、サッと印刷にかかれるんです。原稿用紙にまず目を埋めるなんて作業はなくなる。もちろん、人によっては、そんなことで原稿を書けるかという人はいます。しかし、どこにも活字が出てこないうちに、コミュニケーションが起るんです。ワープロを打ってフロッピーディスクでファクシミリにポンと入れて、スーッと送ってしまいます。いや、ファクシミリどころではなく、フロッピーディスクを巻いて回わる。編集者は、自分のフロッピーディスクに入れて、ビヤッと輪転機にかけてしまう。植字工なんてありません。

そうすると、このエレクトロニクスから起こってくる情報化というものが、人間の思考過程、行為様式にどんな変化を及ぼすか、これは大変なことだと思います。

日本は、世界の人口のびくりにするほどのコンピュータの大国です。さあ、しかし教育の場でコンピュータが活躍しているだろうと思って来てみると、全然入っていない。これはどうしたことか、聞かれます。そういう時には、「何、コンピュータといったって、物や馬や牛と同じようなものです。結局、人間が使わなければだめなのだから、そうバタバタすることはないよ。鋤、鍬、トラクターと似たような道具にすぎないものではないか。」と言うんです。しかし、テレビ漬けになって大きくなっていく世代、パソコンで遊ぶようになっていく世代が大きくなって、キーを操作して情報を送ったり、受け取るという能力がなかったら仕事にはならないという時代は、もうそこに来ています。そういうものへの対応というものを、教育という世界がどうとるか、これは大変大きい問題です。

今度の読者の議論も、情報化については、化物のようなものだから、何を言っているかわからないペーパーになっておきます。ですけれども、私は、500年前にグーテンベルグが印刷機を發明したときよりも、もっと大きい変化が起るかもしれないと思います。明らかに、この情報化によって、子供たちの活字離れが進んでいます。残念ながら、私どもは漫画が読める世代ですが、今の若い世代は、文字で書いたのでは伝わらないというのです。つい最近も、医学部の先生が、「先生の言うことを漫画で描いてください。」という学生が出て来たというんです。冗談じゃない。こんなことが起らない方がいいのか、引き止めた方がいいのか、しかし、いいのか悪いのかの議論は別にして、起っていくでしょうね。それが、社会の動きに対してずれていることの第2番目です。

第3番目。だんだん時間がなくなりますので、漫談したいなことを言っているとどうにもおぼろげですが、少なくとも現実的な問題としての第3番目は、長寿化社会になるということです。これはもう、今、皆さんは実践して受けているわけです。長寿化社会になると、人間の生活のリズム全体に大きな狂いがでてくるわけです。今までは、20歳まで勉強して職場に入ったら、一生懸命仕事をして、定年になってやっと余暇を楽しんで、しばらくしたら、あの世へお迎えが来る、二ついうことだったわけです。ところが、今は、だんだんそうはいかなくなりました。20歳まで勉強して、55歳からやっと定年延長して60歳まで仕事をして、あと20歳前から30歳代半までしているかという時代に入ってくるんですね。これを放っておくわけにはいかないものですから、高齢者は高齢者で仕事をしなければならぬのですけれど、21世紀には、仕事から離れた人間の数は、猛烈に沢山になるわけです。

そして、実際に仕事を受えていく層というのは減っている。そうすると、学校を終わるまでは遊んでいて学校を終わったらしゃくに仕事をして働き過ぎて、日本の労働時間は世界一長いからけしからんと文句を言われるが、しかし、一生懸命に働かないと、20歳までの人と60歳を越えた人を足してみても、一人が一人を支えなければならぬというふうな状態になるのです。これは重いんですね。仕事ができる間だけしゃくにむき張って仕事をやればやるほど、国際的には非難が来る。しかも、そうしないと、若い方と年寄りとを支えることができない。真ん中は、人口が細くなる。これは大変な社会になるのです。

そうすると、どうしても人生の設計を凌ぎなければいけません。勉強して仕事をしてゆっくりするということも、一緒に走らせるというふうにはしないと具合が悪い。というのは、仕事の方もどんどん疲れて進むわけですから、昔のように勉強してストックしたら、仕事に精を出していればよいということでは消滅なくなりました。皆さんのように、こうして始終研鑽もし、勉強もしてはいないと追いつかない。それは、どの社会でもそうなのです。国鉄の職員のことも、余るからもう一遍他へ行つて勉強のしなおしです。こういうことが、もう、どんどん進んでいく社会になるわけです。そうすると、仕事と勉強とはずうと一緒になって、死ぬまで続くようにしないといけない。そこへ、余暇も入れるというふうにはしないといけない。人間の生活サイクルを全部凌ぎていかなければ、追いつかないしやり切れません。それは、国際的な環境の中からも、そういう状態が起ってくる。

それに対して、教育界というのは誠に具合が悪いのです。学校開放といっても、そんな通称らしいことはやめよう。大学に社会人が入るのは困る。大体、入学試験で入れませんね。そういう教育のシステムを全部凌ぎなければいけません。実は、放送大学というのは、そういうところにひとつの発想があったわけです。たにも無理して入学試験で大学に入らなければならぬことはない、職場に入っても勉強をしたいときには、いつでも勉強できるようにしよう。そして、またこれからどんどん勉強しなければならぬ人が増えている。それを、日本の教育界は勉強の場を提供しないから、教育界の外に、カルチャーやセミナーがどんどん入る。脂談訓練が広がる。大学は、ろくろことを教えてくれぬ、とこう言っている。それは、日本の学校教育の没落でしかない。そして、現に新しい創造的な研究というのは、企業の研究の方がいい。大企業の方が素晴らしい研究設備をもって、どんどん金を入れてやっているわけですね。日本の大学は、古くさい、二番館、三番館で古い味を固めています。それは、教育の場が、社会の第一線にくっついて走らないうふうになっていないからです。

小学校、中学校はこれからの子供ですから、目の前の子供は、そう疲れてはいないかもしれないけれども、教

音階度は全く時代離れをしている。それを、世の中の発展に合わせて、どういふふうにもっていかうかということをお考えなければいけぬ。長寿化社会というものに対する教育は、そういう基本構想を養っていかねばならない。

シュテンゲンシュミットというドイツ人で、日本の事情に明かい人がいるのですが、よその国から見ると、日本の学校というのは、離れ小島にボツンとして、まったく世の中から隔絶していますよという言い方をします。自分の子供さんを日本の学校に入れているからわかるのです。社会の中の動きと、学校の中の動きと、これくらいずれている学校というのは珍しいと言われます。それほど、学校が社会の流れからずれているのです。世の中は、もっともっと多様化し、もっともっと個性化し、弾力化していこうとしているのに、学校では相も変わらずひとつのことをやっている。世の中が大きく流れがかわって、子供たちもそこの外の世界に生きて生活をしているということをお考えようとしていない。これは、一般論として、私は多分指摘したいと思うのです。

これまでの日本は、最低水準を上げるということに一生懸命になってきました。一生懸命になればなるほどこぼれていく子供も増える。仕方ありません。今までのような発想で養育すればこぼれます。これも学校教育の仕方として考えなければなりません。また、日本の社会が発展し経済が盛んでいく中で、家庭環境の変化というのは大きい。核家族になった。そして、極端に言うと、家庭というのは、夜に帰って各々がそれぞれ掃洒りするホテルみたいになっている。帰ってみると、お袋さんいない、親父さんも別々の時間にやってくる。子供は子供でひとり朝食を食べている、朝食を食べない子供がたくさんいる。こういう、家庭環境の激変という問題が、学校の皆さん方に大変重い負担を加えている。

これは、日本だけのことかと思ったらそうではないですね。アメリカのデータを読んでお見せして、いやいやこれは日本もこんなことになると思うなよと思いましたが、離婚がものすごく多くは、ています。このテンターていくと、遠からぬうちに、確実に一人一違は離婚するということになる。現にアメリカの学校の先生は、子供がどちらの片親に育てられているかということをお気にしなければならぬということ。そして、今度は母親のところに行ったらどうかとか、その家庭の間の調整、両親の間の調整ということが、学校の先生の仕事に加わりつつあります。エライコッシーという感じがしますね。

実はこれはアメリカの話かと思っていたのですが、私、東京でショックな話を聞きました。というのは、幼稚園の先生が「この頃子供たちは言葉を話さない。叫んでいます。幼稚園の所場やいろいろなところで遊んでいるのを見ると、ギャー、ウォー、ヤーという叫びでしかありません。木田さん。」というのです。子供から、言葉というものがなくなってきています。困ったことです。それも深刻な問題ですけれども、こういう話も聞きました。ある父兄が来て、「どうせよろしくお預かりします。」というので、「あずかりましよう。」と言ったとたん、「先生ありがとうございます。あずかってもらったら、私もう離婚していいでしょうか。」と園長に相談するのだそうです。それほど、家庭というものに対する考え方が容易になっているというが、崩れているというのですかね。ですから、幼稚園の先生がそういう人生相談に対処しなければならぬと、こんな状態が起こりつつあります。

それで、実はこれ、全国教育研究所連盟が手分けして行った最近の調査の中で、エライことになっているのだと思ってびっくりしたデータが集まってきました。それは、小、中、高の先生方に、学校で子供たちを教育している時に、何が最も教育上大事だと思っただけで、という質問を10項目ほど書いてもらっ

たのです。そうすると、小学校の先生も、中学校の先生も、高等学校の先生も最もウェイトを置いているのが体力を培うことでした。そうですが、先生方はそれほど子供たちが虚弱に見えますか。それほど体力をつけてやるということが、先生方のトップ関心事ですか。その次にいつくしみの心を育ててやること。次に忍耐力を育てること。4番目は忘れてましたが、小学校の先生で5番目に、やっと学力をつけるということが出てくる。中学校の先生で、学力というのは4番目、高等学校の先生で3番目です。上からそのまでは、考えてみると「保育」の仕事ですよ。「家庭」の仕事ですね。それで、なるほど学校は今や保育所になっているなあと、先生方のアンケートの返事をもらって考えたことです。

それで、今夜学校に行ってみると、あなたのお子さんは学力が弱いかから塾へ行って下さいとあしやると、こう言うんです。学力は塾がつけるところだ。これも大きな変化ですね。

こういうことから、教育の問題というのは、いろいろの問題として今、皆さんの関心事になってきているわけです。皆が何とかしなければいけない、教育はこのままでいいか、学校はこのままでいいか、という大きな流れの中にある専断というものを私なりに理解すると、今お話ししたようなことになります。

そういうことを考えながら、御紹介あったように、私も長い間役所で仕事していました。教育をしていたわけではないです。ビジネスをやっていたわけですからね。教育研究所に行きまして、初めて教育は何かということをお考えなければならぬようになったわけですね。そこで、一体教育とは何だろうかと自分なりにあわていろいろの人に聞いたりしました。実践的な経験という、大学で学生に講義をするくらいですから、これは先生方の教育の実態とは違う。個人的体験からすれば、子供を育てた経験というものがあるわけですが、大体自分の子供というのは言うことをきかないという前提で取り組まないと具合悪いですね。ですから、親の言うことをきかないのに、学校の先生はよく子供にものを言って聞かせているなあと感じているだけだったわけですね。しかし、その教育というものは何だと考えなければならぬようになった。

私なりに教育研究所で働いている間に得られたことは、こういうことなんです。教育というのは確かに先生が生徒を教えることだ。それを教育者の人たちは難しい言葉で言うんですね。「教育というのは、自然成長的な形成の過程を望ましい方向に向って、目的意識的に統御しようとする試みである。」と、宮原誠一さんの「教育論ノート」に述べている。わかりやすく言うと、村井実さんは「要するに教育というのは、先生が生徒を良くしようとする、仰はそうとする試みである。」と言うのです。

しかし、しかしですね、先生が生徒に対して、ああだこうだと言って引き上げていこうとすることが、本当に効果を持つというのは、実は、教えられている人間が自分でやる気になった時じゃないですね。確かに先生と言われる学校の先生とお医者さんですが、お医者さんがあしやることは、「治るのは患者さん自身の治療力なんです。我々は治すきっかけを与えているに過ぎないんですよ。」ということです。ですから、そういう点で考えますと、教育というのは、教えるというより、学ぶという方にウェイトがあるというふうに考えざるを得ません。結局、教えるということには限界があるのでして、ある時期、組織的に教えなければならぬかも知れませんが、しかし、本当は自分で学ぶということが、ずうと生涯ついていくように生涯学習するということにならなければ、教育にはならない。

したがって、教育の完成された姿は自己教育である。浦子園さんという方が東北大学におられました。あの方が「人間形成と文化」という第一法規の大きな叢書の第一巻に並行本を書いておられますが、その中に「教育の完成された姿は自己教育だ。」と書いています。教育というのは、自分が勉強することであり、

自分が学習するということなのだ。では、学習して知恵をつければいいかという。実はそれは、子育ての入口であって、物知りになることが教育ではないです。自分が分かることです、自分の位置づけが分かることです。自覚ある人間になるということ、それが最高の段階にまで行き着いたら悟りのある人間ということです。死ぬ時に、せめてバタバタしないで、その悟りの境地に入りたい。それが人間の教育の最高の段階であると、こう考えるのです。

しかし、ともかく、その範囲で教育というものを考えている時には、人間は自然に大きくなるから、それをもうちょっと、速度を増してやるとか、少しいい方向へ価値観を入れて高めることが教育だというふうに考えた。それで、実は、教育にかかわる人たちは、発育とか、育つということについて、心理学の人以外はあまり関心と向けていません。ところが、今起こっている問題は何かと言ったら、「教育」の「育」の方に問題があるのですね。臨救済には、小林登という小児科の先生が入っておられるのですが、その方が、育てるということも、もう一遍考えなければいけないと言っています。子供は、五感、五体の基礎を、母体の体内で育てて出てくる。生まれて、育ってきて五感と五感を伸ばす。その基礎は、従来の教育では、教育の前段階の考える必要のないこととされてきた。ところが、そこがどうも怪しくなってきた。戦後まもなくの頃は、産褥熱というものがあって危ないから、早く保育器に入れて母親から隔離して、衛性状態のいい所で育てるほうがいいということでした。ところが、そのうちに、どうも親と子供の間がうまくいかない子供が沢山出てきた。特に、アメリカでは、母親が子供を痛める、大きくなって母親を殺すのではなく、小さいうちから母親が子供を無残にも痛めるというケースが沢山起こってきた。どうしてかと考えてみると、どうもこのお産の直後の子供の扱いと関係がありそうだ。早産で保育器に早く入れた子供ほど具合が悪い。要するに母親に母性が育たない。ですから、生まれからできるだけ早く母親のそばにくっつけてやらなければいけない。従来のように、産褥熱が危ないからと隔離していたのでは具合が悪いので、できるだけ早く母親の心臓の動きを、もとの音楽のリズムを、赤ん坊のからだで感じて、安心させて母子の相互関係の中で育てていかなければいけない。目を見て、母親が呼ぶかけを、やるから見えるようになる。それを目隠ししたまま2週間放っておくと、目は永久に視力を持たないのだそうです。ですから、生まれた時から、そういう相互作用を通じて、持っているエネルギーをきざ立たせるといふようにしてやらなければ具合が悪い。ところが、以前、母乳を飲ませると顔が悪くなるというような新聞記事を、私読みましたね。ところが、今やそういうのは、小児医学からすると外道だったと今頃になって言っているわけですからね。お医者さんというのも、あまり頼りになりませんね。学問も大したことのないなあと思うけれどもですね。やっぱり、人間の自然の姿に次する状態というのは良くないので、こう抱いて、乳を飲ませて、その乳が一番いいんですよ。そして、一刻も早くくっつけてやら、た方が、乳の張りがいいし、乳が良く出るのだそうです。ですから、その辺から、その「育つ」「育てる」ということを考え直さなければいけない、という問題が始まっているわけです。

幼稚園に入っている子供、保育所に入っている子供を比べますと、明らかに保育所に入っている子供の方が言語の発達が遅れます。それは、言葉を交わさないからです。しかし、また、母親とだけしかいつまでも言葉を交わさない子供も困るんですね。やっぱり、小学校3年頃からは母親語れをして、父親とのものの言い方、大人の世界、別の世界とコミュニケーションすることをしてやらないと、お母さん言葉のままだけになってしまう。そして、その範囲が、その範囲から外からはいという問題が起こる。

ですから、こういう成長の過程そのものに、もう少し考えていかねばならぬ問題が、今起こっている

わけです。人は人の子でありまして、猿に育てられれば猿にしかならない。人が育て、そこに情を交わすこと
によって、発育が進んでいくという問題意識を今更のごとく考えています。教育環境の人間化ということを経
教書では言ってますけれども、実は、もっとプリミティブなことを実践していきましょうということです。こ
れも困った事ですが、社会が進歩し、経済が進歩し、家庭の生活というものが社会化する。お産を自分の家で
する人というのは5%もいない。ですから、そういう生命の誕生とか、そういう問題が、みんな家庭の外に出
てしまう。こういう家庭環境の変化ということも、その人間が育つという基本に立ち返って、考え直さなければ
ならないというふうに思います。

実は、それが教育の基本的なことかと思ったら、いやいや教育というものはそのようなものではない、教育と
いうのは社会的機能だ、社会的機能の中に本来備わったものだ、ということをおっしゃる人がいます。それは、
デュルケムから始まって、日本では、今、社会教育学の人達がそういうことを言うわけですね、確かに、社会
が教育をする。学校というのは、社会の中で、教育的機能を高めるための組織的機能であって、高めるという
ところに力を置いた組織である、社会的組織である。そう言われると、なるほどそうだ。学校教育はそれか
う社会的な機能であると考えます。また、社会教育も、自然の状態に置いておいたのでは具合が悪い
から高めよう、それが教育だというふうに、教育を目的的に限定的にとらえる考え方があります。けれども、
私は、ちょっと問題がある、というふうに思います。

教育はもっと自然なものです。例えば、花ほど、文盲対策のことをお話ししました。一生懸命、印刷物のない
所へ印刷物を持ち込んで行って、一生懸命学校の先生をして教えて、何年かたって行って見たら、その地域
に印刷物は一つもなく、あったのは、捨てられた教科書だけであつた。という事例が数多くある。実は、
社会の環境の影響かというものが基盤にある。そのことを無視して、一生懸命引張ろうとすることだけが教育
だと考えることは間違っています。環境の感化力という問題が、教育の根源ではないかとさえ思えるんです。私は、
環境の感化力という側面の大きさを無視して教育を考えてはいけないと思います。

環境は、無意識的に教育をしてくれるわけです。自然環境から始まります。暑い暑い国の人、自然環境
によって皮膚の色まで違う。食物も違う。文化環境も違いますね。私は先生方にお話したいのですが、今の
ように日本語が喋るようになってはいけません。日本語というもので、我々がものを考え、生活し、大きくはなっている。日
本語は、国語の先生だけの問題ではない。教育を通じ、日常生活を通じて、日本語というものを大專に培って
いくようにしないと思考力も弱くなる。叫びては困るのです。我々は、日本語という文化環境の中にいるわけ
です。この日本語という環境は、学校が意識して作ったわけではない、学校の前にあるのです。この日本語の
環境を大專にするところから、日本語のできない子供は「退けー」ということにもなるのかもしれないが、
そこは、オープンマインドにしなければなりません。

しかし、こういう文化の環境が、あるいは宗教の環境というものも、どれだけ人間の行動様式を大きく規定
するか。イラン、イラクの「イテ-イテ 戦争」などを見てましても、アラブの世界のいろいろなことを見てま
しても、文化環境なんですね。あれは、学校でこう教えたから直るというものではないと思います。

ですから、そういう点から考えてくると、学校の先生というのは、何人か集まっておしゃべりしていること、
「ああ、あれは先生だ」と分かる、そういう文化環境ができる。職域の環境ができる。先生方が、ここで苦
勞されるのは、僻地の問題でしょう。僻地の環境というものが、僻地の子供を育てているわけです、都会と
は違う。では、なぜ30年前と比べて僻地の教育水準が上がったかということ、先生方の僻地教育の努力もあるとは

思うけれども、私はテレビがかなりきいていると思います。要するに、環境のもっている情報環境というものが昔の僻地と今の僻地とでは、大差違っている。僻地へ行ってみてもガスもあるし、電気もある。環境がすっかり都会になっている。そういう違いが僻地の学力を高めている面がかなりあるというふうに思うわけです。

こういう環境の違いというものに、どのように対応するか。その環境の力というものを、どういつぶに教育的に高めるか。教育というのは、直接引き振ることの他に、その環境を介在するというところに力を入れなければ本当のものにはならない。そのいちばんいい例が家庭です。家庭教育というのは、家庭で親がものを言うから教育なのではないのです。家庭という環境のもっている感化力、栄養素が子供を育てるのです。親がものを言っていることが教育だと考えるのは、教育をあまりにも直接的に、ストレートにつかまえています。だから、教育が曲がるのです。「おのがまねするなと親は、子に意見」という川柳があります。社会教育の人はみんな知っています。親の言う通りにはならないけれども、子供は親のする通りになるものです。学校の先生は、そういうふうに考えないかもしれませんが、しかし、ここは大差大差なところだと思えます。

そうですから、家庭教育というのは何だと言えは、家庭の環境の感化力であって、お母汁の味であったり、食べ物の味であったり、「ごちそうさま」ということが家庭教育なのです。それを一面では、疑いと言いますが、疑い以前の問題でもある。たまたま、いていもそこにある家庭の雰囲気、環境の感化力は何かと言ったら、結局、人間の作ったものだけということ。家庭というのは、好きな男と、好きな女が一緒に住んで作って、子供ができて、家庭ができて、それは、係累その他も一緒に住んでいますから、二人だけで完全に作れるものではないけれども、結局は、自分で選択した道であります。その選択した家庭という環境によって、節操もいろいろなものも規制されてくる。地域の学校は、地域の環境によって規制されたものです。学校を良くするというのは、学校を含む地域環境や家庭環境を良くする以外にありません。そういうふうにごく考えてみますと、人間は人間として人の子であって、人によって育てられ、人によって導びなければ人間にはならないと同時に、人間は環境の子であって、環境の絶大な感化力というものを無意識のうちに受けるということになります。

情報化のこわいのは、実はそういうところで、情報環境というものは、すっかり違っている。その環境の感化力というものを考えながら、その情報環境をどのように作った方がいいのか。テレビ会社のやることだから、これは仕方がないと言ったのでは早合意のものです。実は、放送大学を考えようとしたのは、日本のテレビがみんな俗化していくのでは困るし、もう少し情報環境を交えたい、テレビが全部通訳機では困る、もう少し、専門誌がテレビの中に出てくるようにしないと、情報環境が曲がるのではないかと、そういうような気持ちをもっていただけです。

古い話ですが、華前^{トシノ}東北大学に村岡典綱^{ノボ}という方がいまして、「日本思想史研究」という素晴らしい4冊の本をお書きになっています。この方は、教育によって文化を創るということを書いておられます。日本の思想史というのは、日本の教育史なのだ。思想というものをつくる人間を育てること、環境をつくる人間を育てること、そこに教育の大きき意味合いがあります。教育というのは、そういう人間をつくり、環境をつくり、地域をつくり、領域をつかっていくという大きき仕事をもっているのです。それだけの大きき意味のある仕事であり、人間生活そのものにピタッとくっついた活動なのです。決して、それだけを取り出してどうこうということだけで済む問題ではない。ですから、皆さん方の教育とその背後にある大きき人間の営み、全体との関係というものを考えながら、教育を進めていかねければなりません。この意味で、今日、我々が直面しております教育の課題というのは、大差大差な文明的な転換期にあるので、大差大差な転換の課題として受け止

めなければなりません。それは、結局は、一人一人の行動の問題として、心の問題として受け止められるようにならなければなりません。

では私は、教育の課題として、いくつかまとめて申し上げる時間がなくなりました。しかし、今までお話ししてきた中で、何をこれからやらなければならない課題として皆さんが受け止めてくださるか。これは、皆さんが、一人一人ご自分で受け止めて、自分の課題として解決していくように努力していただく以外には、改善の方法はないのです。

熊教審で何かやっている。その答申を受けて、中曽根内閣が何かやらなければならないであろう。そんなことではありません。そんなキチキチなものではないのです。今、私たちが当面している大きな課題というのは、もっともって、基本的な、大きな文明の転換の中にある。それをどのように受け止め、実践していくかということば、一人一人の問題です。自分の責任の問題として考えなければなりません。もちろん、国家も国家の責任の問題として、制度論として考えなければなりません。県も、それぞれの制度論として考えなければなりません。研究センターも研究センターとして考えなければならぬことでもあるので申し上げて、他人が何かやってくれたら良くするだろうというようなことでは、この本質的な問題を解決できるとは思いません。

ですから、私は、教育改革の課題というのは、自由とか選択の自由とか、そんなことではなく、自己責任を確立することであると考えます。これが、私の主張しているところなのです。自由にして、日本の社会がどれだけ画一化したか。テレビ、マスコミ、その他、全部、競争すればするほど画一化します。なぜか、自己に本質的な責任意識がないからです。自分で責任をもって自分の生涯を歩む。こういうものの考え方を、本當に植えつけて、世界中どこへ行っても、それで行きかざる人間になる。この発想の転換こそが、教育改革の課題だということ考えているのです。

長いこと、一人で勝手なしゃべりをしまして、ちょっと約束の時間を越えました。ご清聴感謝いたします。